

砂浜美術館30周年記念イベント「カンガエルバ」

平成元年に設立された「砂浜美術館」。今年30周年を迎え、記念イベント「カンガエルバ」が11月4日(月)・5日(火)の2日間開催されました。

4日(月)には、砂浜美術館の30年を感じ、考え方を持つことや誇れるものなどについてそれぞれが考えるきっかけにしてほしいと「すなびシンポ」が土佐西南大規模公園体育館で行われ、約90人が参加しました。同シンポジウムでは、町出身のギタリスト・松田弦さんの生演奏に合わせ同美術館の作品を紹介する映像が流されました。また、ワークショップでは、同美術館のスタッフが選んだ365枚の写真からカルタを作る「しあわせかるた作り」を行いました。参加者は8チームに分かれ、さまざまな写真から指定された頭文字の言葉を考え、オリジナルのカルタが完成し、梅原真さんが「カタルカルタ」と名付けました。その後、海のバザールで、「美味しい作品」を味わうバーベキューが行われ、同美術館に関わる人たちの交流の場となりました。

5日(火)には、町内の小・中学校と大方高校の生徒約700人が参加し、「4kmでひらひらします。」が行われました。過去のTシャツアート展での応募Tシャツを集めたものや歴代大賞作品のレプリカなど約2,000枚をロープに通し、入野海岸約4kmに渡り子どもたちがロープを持ち展示しました。浮鞭の砂浜には、町砂像連盟などによりクジラやイルカの砂像が作られ、同美術館の30周年を祝いました。



くす玉開披



真剣にカルタを考える参加者ら



砂像連盟の皆さん



4kmのひらひらの風景

第5回地区防災計画シンポジウム・夜間津波避難訓練

11月2日(土)、大方高校で「第5回黒潮町地区防災計画シンポジウム」が開催され、約200人が参加しました。

同シンポジウムでは、佐賀中学校の「かかりがましい防災」で犠牲者ゼロをめざすための地域を巻き込んだ避難訓練の様子や、大方高校による「オリジナルHUG」や「逃げトレ」アプリを使った地域との避難訓練の取組が生徒から発表されました。また、熊井地区の携帯電話を使い告知端末機からいち早く避難情報を伝える取組や、入野本村地区の大方改良道路開通後の避難経路の確認など、自主防災組織から活動報告がありました。

その後、「西日本豪雨の経験と犠牲者ゼロ集落の取組」と題し、愛媛県大洲市三善地区の窪田亀一自治会長から講演がありました。平成29年に内閣府のモデル事業に採択され、住民全員が氏名や血液型、避難場所などを記載した「避難カード」を作成した取組や、西日本豪雨で被災した時の状況などを踏まえ、「命があつて後世につなげることができる。普段からコ

ミュニケーションを取り合い、地域で協力し合ってほしい」と話しました。

最後には、コーディネーター1名とパネリスト4名が「学校と連携した地区防災計画」というテーマで討論しました。議論の中では同シンポジウムの振り返りなどを行いながら、東京大学大学院の片田敏孝特任教授は「大人が子どもたちを頼ることで、子どもたちは地域に貢献できるという喜びを感じる。地域のみならず防災に向かい合い、取組を続けることで防災を特別なものとして考えず、次なる一歩を踏み出してほしい」と話しました。



パネルディスカッションの様子

同日には、「夜間津波避難訓練」も行われ、町民約3千人が参加し、地区ごとに指定の避難場所などへの避難後、避難所開設訓練などが実施されました。
(関連記事11ページ「備えて安心」)